

## エドワード・トンプソンとインドのナショナリズム(その1)

—イギリスとインドの和解を求めて—

小西真弓

ラビンドラナート・タゴールの研究で有名なエドワード・ジョン・トンプソン (Edward John Thompson, 1886~1946年) は, E. M. フォスターと同様に自由主義的ヒューマニストとしてインドにアプローチした作家であるが, 作品に文学・芸術性が欠けるためか, 英文学の研究対象にされることはあまりない。しかし, ポストコロニアル研究が盛んになった近年, 旧イギリス植民地出身の研究者たちは, しばしば彼をフォスター以上にインドに精通し, ナショナリズムの問題に真剣に取り組んだアングロ・インド作家として再評価するようになった。インドのナショナリズムをテーマにしたトンプソンの数多くの小説, 戯曲, 評論が彼らの関心をひきつけるのは, メソディスト・ミッショナリーの良心に照らしてイギリスのインドに対する過去の罪業を暴露して償わせようとする姿勢が斬新であり, 彼の描くナショナリストたちが, 一般的なアングロ・インド小説に登場する野蛮な狂信者あるいは無分別なテロリストではなく, それなりの分別や深みをもつ人間として性格付けられている故であろう。実際にトンプソンはタゴールやガンジーをはじめとする多くのインドの精神的指導者やナショナリストと接触をもち, 彼らの良き理解者であった。とはいえ, 彼のインドのナショナリズム運動・独立に対する思いは複雑で, 時代の趨勢と共に揺れ動き, 「インドよさらば」という心境に至るまでには様々な苦悩や内面的な葛藤を乗り越えたようである。また英印関係が悪化する時代にあって, インド人には「自尊心」を, イギリス人に対しては「寛容性」を取り戻せというトンプソンの訴えは, 結果的には双方にさほどアピールしなかった。さらに人種差別的な帝国主義体制には異議を唱えるものの, 反帝国主義者とも言えない中道主義的な彼の見解が, その作品の迫力を損なっていることも否定できない。インドの読者にとっては, 当時の一般的なアングロ・インド作家と同様, 彼が小説の中でナショナリズムの背景にある経済的搾取の問題にあまり触れてないことも遺憾であったと思われる。しかしガンジーから「インドの虜」と評されたトンプソンのインド問題への誠実な取り組みが反映されている作品は, 今日なお再読に値する。

キーワード: E. J. トンプソン, インドのナショナリズム, 教育ミッショナリー

\*テキストには, Edward John Thompson, *Atonement: A Play of Modern India in Four Acts* (London: Ernest Benn, 1924) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

### 序

ウィリアム・ブラウン・ホックレー (William Bronwne Hockley, 1792~1860) が本格的な元祖と言われるアングロ・インド作家たちは, 近年にいたるまで1857年のインドの大反乱をテーマにした物語を数多く描いてきた。彼らにとって, 「セポイの反乱」という通称

が示唆するように、大反乱はセポイのクーデターが発端であり、地方に飛び火したとはいえ、一部の不満分子の蜂起で、インド人こぞっての「革命」あるいは民族活動とは考えられなかった。イギリス作家の「反乱小説」は多かれ少なかれ、「野蛮な」反徒を成敗したイギリス軍人の武勇伝を称えるばかりで、インド人の反逆の原因を深く追求し、東インド会社の搾取を批判しているものは稀である。しかし、19世紀後半から登場する西洋教育を受けたインド人のナショナリズムを描くのは、帝国主義を支持するアングロ・インド作家にとって事は単純ではなかった。当初、彼らはキプリングのように忠実なインド人やアングロ・インド社会のメンバーを中心に描き、<sup>1)</sup> 物語の舞台にはナショナリズムに無関係な辺境や、イギリスの陣営地を選んだ。またインド史に関心をもつ帝国主義作家たちは、現実からは目をそむけて、過去のイギリス軍人やインドの英雄の武勇伝をテーマにすることを好んだ。このような傾向は、20世紀初頭まで続いたが、ベンガル分割令（1905年）を契機に急速に高まった民族運動が無視できない状況となって以来、ナショナリストがアングロ・インド小説にしばしば登場するようになった。<sup>2)</sup> 英領インドの支配階級の奥方であったF. E. F.ペニー（Fanny Emily Farr Penny, 1847～1939年）やモード・ダイヴァー（Maud Diver, 1869～1945年）にとって、イギリス支配の土台骨を揺さぶり、自分たちの生活基盤を失わせる民族活動は、忌まわしく感じられたのであろう。それは何よりも、彼女たちの小説に登場する急進派のナショナリストたちが、ミッションスクールを卒業しようと、オックスフォード大学出であろうが、「情緒不安定な西洋と東洋の混合物」あるいは西洋の思想やマナーが骨の髄まで浸透しない「半野蛮人」として性格付けられていることから窺い知れる。また、帝国主義のあり方に疑問を唱える、エドマンド・キャンドラー（Edmund Candler, 1874～1926年）やクリスティーン・ウェストン（Christine Weston, 1904～1989年）でさえも、インド人の反英感情に理解を示すものの、政治的な展望もなくイギリス人に対する個人的な憎悪にかられて、ナショナリズムに身を投じるインド人を描いている。1930年代までのインドのナショナリズムに対する否定的な見解、即ち彼らの自治能力に対する疑念は、帝国主義への視座を問わず、アングロ・インド作家全般に通底するものであった。

このようなアングロ・インド小説の伝統を考慮すると、ブーパル・シンが「純粋なインドの愛国主義者の信憑性のある肖像画を描くことに例外的に成功している」<sup>3)</sup> と評価したエドワード・ジョン・トンプソンの作品は、<sup>3)</sup> ポストコロニアル研究のためにも再評価されるべきであろう。それはイギリスでは「不当に無視されている」彼が、<sup>4)</sup> 近年とりわけ旧イギリス

1) キプリングの“On the City Wall”に登場する西洋教育を受けたインド人Wali Dadはイギリス、インド双方の社会から疎外され、将来ナショナリズムに傾倒することが懸念させる人物として描かれている。しかしインド滞在中に見聞したはずのナショナリズム運動について、キプリングは何のコメントもしなかった。彼にとってインド人の自治など一笑に付すべき問題であったと思われる。この点に関しては、Kai Nicholson, *A Presentation of Social Problems in the Indo-Anglian & the Anglo-Indian Novel* (Bombay: Jaico Publishing House, 1972) 4-5参照。

2) アングロ・インド小説とナショナリズムの関連については、Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974) 195-220参照。

3) Singh, *op. cit.*, 206.

4) Michael Edwards, *British India 1772-1947: A Survey of the Nature and Effects of Alien Rule* (London: Sidwick, 1967) 317参照。

植民地出身の研究者に注目されるようになったことから裏付けられる。本稿では、『償い』(Atonement, 1924年)を通して、最終的に「インドよさらば」という心境に至る前のトンプソンのインドのナショナリズム観を、彼の伝記的事項や歴史的背景を念頭に探求してみたい。

## I

アングロ・インド小説の解釈にとって、インドへの関与を含めた作者の伝記的事項を探ることが必要であることは言うまでもない。東インド会社や帝国政府に関わりのある作家には、支配階級の威信を傷つけたり、インド統治に悪影響を及ぼす故に、描くことがタブーであった光景やテーマもあったに違いない。例えば、19世紀末には存在していたはずの、イギリスからの浮浪者や娼婦まがいの女性はアングロ・インド小説には見当たらない。インド人と結婚したり、インドのナショナリズムに加担するイギリス人が立役者として描かれることもごく稀であった。しかるに、トンプソンがあえて「インドの愛国主義者の信憑性のある肖像画」を描いたり、インドの大反乱について禁書になったサヴァルカールの著書を連想させるような『メダルの裏面』(The Other Side of the Medal, 1925年)や『償い』を執筆したのは、<sup>5)</sup> 経済的にあまり恵まれないメソヂストのミッシヨナリー<sup>6)</sup>の家庭に生まれ育ったことにも深くかかわるのではないだろうか。

エドワード・トンプソンは、カンバーランド生まれのメソヂスト・ウェスレー派ミッシヨナリー、ジョン・モーゼス・トンプソンと、マンチェスター出身のウェスレー派教育ミッシヨナリー、メアリー・ペニーとの間に生まれた三番目の子どもであった。<sup>6)</sup> 彼が誕生した1864年に両親は赴任先のマドラス管区のネガパタム(Negapatam)から一時帰国中であった。姉と妹二人、4才下の弟は南インド生まれで、末の弟は父親が病気のためにウェールズへ転任後に誕生した。子ども6人を抱えた宣教師の両親の生活は決して楽とはいえず、インフルエンザが大流行した1893年に夫妻は病に倒れ、父親は一年後、エドワードが8才になる前に他界してしまった。母親は子どもたちを引き連れ、マンチェスターに近いストックポート、後により実家に近い町サウスポートに移り住み、遺族年金に頼る苦しい家計をやりくりして、中産階級の体面を保つ生活を維持した。そのような家庭環境の中で、エドワードの兄弟姉妹は中等教育を受けるために、貧しいメソヂスト聖職者の子弟を預かるキングスウッド・スクール(Kingswood School)に進学した。在学中、エドワードは「初等ケンブリッジ試験」(Junior Cambridge Examination)に合格するほど頭角を現わしたが、宗教色が濃

5) トンプソンは、『メダルの裏面』で、執筆当時にイギリスの高官の暗殺計画等に関与した容疑で服役中だったサヴァルカール(Viyak Damodar Savarkar, 1883~1966)の*War of Indian Independence of 1857*に言及している。1908年にパリで発刊され、イギリス、インドで禁書にされたこの作品は、大反乱時のイギリスの非道を暴露した作品であり、トンプソンが参考にした可能性は否定できない。Thompson, *The Other Side of the Medal* (1925; rpt., Westport, Connecticut: Greenwood, 1974) 122-23; V. D. サヴァルカール著、鈴木正四訳「セポイの反乱」『世界ノンフィクション全集7』(筑摩書房, 1968年)参照。

6) トンプソンの伝記的事項については、Mary Lago, *India's Prisoner: A Biography of Edward John Thompson, 1886-1946* (Columbia: University of Missouri Press, 2001) によっている。

く情操教育に欠ける学校教育は、詩人肌の彼には合わなかったのであろう。卒業を待たずに退学した彼は、母親の要望もあって、ロンドン・ミッドランド銀行に就職する。しかし、職場はあまりに世俗的で、彼の詩的想像力を枯渇させる雰囲気か漂っていた。嫌気がさした彼は間もなく銀行を退職し、父親のような宣教師になって身を立ようと1907年にリッチモンド神学カレッジへ入学し、1910年に牧師として任命される。その後、数か月ストーンハウス (Stonehouse) やソートリイ (Sawtry) で牧師職に従事した後、友人の勧めもあって、インドのベンガル地方の小都市、バンクラ (Bankura) へ教育ミSSIONナリーとして赴任することを承諾する。

エドワード・トンプソンがインドへ赴いたのは無論、宣教師として生計をたてるためであった。幼少期に過ごした南インドのトリチノポリ (現・ティルッチラパッリ) の想い出はおぼろげながらも牧歌的で、両親のようにインドで布教活動に励むことは社会的にも意義のあることに思えた。また神学カレッジ時代から文筆活動に熱中していた彼には、インドで知の水平線を広げ、新たなインスピレーションを受けることも必要に感じられた。実際に彼はインドで出会ったノーベル賞作家タゴールの文学作品に感銘し、彼をイギリス人に紹介しようと、ベンガルの言葉や文学を学び、後にインド問題に通じた作家、歴史家として名を挙げ、オックスフォード大学で教鞭をとるようになる。確かに、文化や言葉の違いの問題で、トンプソンは度々タゴールを憤らせたが、<sup>7)</sup> インドにおける彼との出会いこそが、その後のトンプソンの人生を大きく変えることになる。タゴールからの批判も、教育MISSIONナリーとしての辛い体験も、インド問題をテーマにしたトンプソンの作品にはなくてはならないものであった。彼がバンクラに滞在した第一次大戦前後は、インドのナショナリズムばかりではなく、西洋においても世界観が大きく変化した時代であり、その時代状況の変化およびそれに連動したイギリス、インド人双方の意識の変容は、1920年代から30年代にかけて執筆されたトンプソンの作品にも色濃く反映されている。

## II

1910年にトンプソンを迎えたバンクラは、社会的に不穏な状況にあった。当時、西ベンガルの小都市であった当地は「非進歩的で、問題にされることもあまりなく、概して田園的な性格をもつ」という官報 (1908年) の報告とは裏腹に、<sup>8)</sup> 住民の胸中にはベンガル分割令を契機として高まった反英感情が潜んでいた。従来ベンガル人と言え、インドの大反乱時

7) トンプソンは、バンクラに赴任するまでベンガル語を習わず、当地でイギリス人にベンガルの歴史や文化をイギリス人に紹介する必要を感じてベンガル語を学んだが、その語学力は、完璧ではなかったと言われる。またタゴールも、英語の作品を執筆したが、自分のベンガル詩を英詩の韻律に合わせて英訳できるほどの英語力はなかったようである。トリヴェディによれば、トンプソンの評伝『ラビンドラナート・タゴール：詩人、劇作家』がタゴールを憤らせたのは、翻訳の不具合よりもトンプソンが支配民族に属する故にタゴールに対してなれなれしい友人のごとく振る舞い、東洋的な畏敬の態度を示さなかったことによるという。この問題に関しては、Harish Trivedi, *Colonial Transactions: English Literature and India*, (Manchester: Manchester UP, 1995) 105-21参照。

8) Lago, *op. cit.*, 49.

にも蜂起することなく、尚武の民であるラージプート族、パターン人、シーク教徒を好むイギリス人の目には、「女々しい」とさえ映った。<sup>9)</sup> 彼らの中には西洋教育を熱心に受容し、「ベンガル・バブー」(Bengal Babu, イギリスかぶれのベンガル人書記)という蔑称が示唆するように、イギリス官吏の下で働くヒンドゥー教徒も多かった。そのような背景にもかかわらず、バンクラのような僻地にさえ、スワデシ(イギリス製品不買)運動が繰り広げられる光景にトンプソンは衝撃を受けた:

「極端なスワデシ運動は事実上消滅した」とのことだ。しかし、実際にはベンガルこそスワデシ運動の温床だ。カルカッタ警察は街頭演説を禁じた。バンクラ地区のある町で、手に負えない500人の群集が禁句であったスローガン「バンデー・マータラム(母なる大地を称える)」を大声で30分も張り上げ、振り下ろされる警棒を払いのけて、それをへし折ると威嚇している。<sup>10)</sup>

スワデシ運動に象徴されるベンガル人の怒りの矛先は、無論ミッシヨナリー活動にも向けられた。20世紀以降のメソヂスト・ミッシヨナリーのインドにおける活動は、原住民の改宗よりも教育に重点が置かれていたが、ヒンドゥー教の理念に合わない聖書の教えは、民族運動の高まりと共に、より原住民の反感を買うようになった。トンプソンがカレッジのスタッフから歓迎され、生徒たちから敬意を示されたとすれば、それは学位のある彼の英文学教育が生徒たちのカルカッタ大学への入学に役立つ故であり、ミッシヨ活動が期待されていたことではなかった。なるほど、学園にはキリスト教徒に改宗した生徒も在籍していたが、彼らにとって聖書の教えを理解するのは容易ではなく、英文学を学ぶにせよ、ただ試験に備えるためにオウム返しに英文を丸暗記することが奨励された。それはまだしも、あるヒンドゥーの生徒は、偶像崇拜を笑ったり、牛を危険視する下りのある聖書の「ローマ人への手紙」や「詩編」の講義に怒り、トンプソンに爆弾のようなものを仕掛けたという。そのような事件に遭遇した彼はバンクラに嫌気がさし、かつて父親が宣教活動をしていたネガバタムへ転任したくなる。

しかし、教育ミッシヨナリーとして数年もたたないうちにバンクラの生徒をスワデシ運動の嵐の中に置き去りにするのも彼には無責任な話のように思われた。折りしも1911年のベンガル分割令の撤回等によってテロ活動は下火になり、当地に踏み留まることを決意した彼は、ベンガルでイギリス人と原住民が和解するためにまず必要なのは、支配者側がインドの歴史や文化を再評価して、インド人に対する認識を新たにするのだと悟るようになる。インド人に「野蛮人」あるいは「劣等人種」というラベルを貼り、自分たちに好都合な政策や文化を押し付ければ、彼らが反英感情を抱くのも無理からぬことであった。

ミッシヨカレッジで教鞭をとるうちに、トンプソンはカルカッタ大学への受験資格を得ることが主目的であるカリキュラムや受験勉強が真にインド人のためになるのか疑問を懐くようになった。確かにカルカッタと言えば、東インド会社時代から、西洋の近代文明や思想、

9) このようなイギリス人のインド人観については、Allen J. Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960*, 127-8参照。

10) Lago, *op. cit.*, 49.

政治の流入口であり、インド人にもカルカッタ大学を卒業すれば高級官僚への道が開かれていた。そのためにバンクラの生徒が、当地に魅惑されるのも当然だった。彼らは大学の受験資格を得るためにスパルタ式教育のようなカレッジの授業にも耐え、親たちも我が子がカルカッタ大学へ進学することを切望した。しかしそれは生徒の健康を犠牲にし、中産階級の親の財産を枯渇させることでもあった：

大学レベルの試験を受ける資格を得た生徒たちは、勉強のために都会へ群がった。その勉強とは、独学にしる、キノコのように急成長した詰め込み式の塾で学ぶにせよ、ノートや要約の内容を丸暗記することであった。生徒たちにとっては初めての都会体験だった。彼らの殆んどは、中産階級の中層あるいは下層の出身で、カルカッタの個人経営の下宿へ息子を入れるために、親たちは資産を枯渇させたり借金をした。しかるにその下宿は汚く、快適ではないと悪く言われていた……<sup>11)</sup>

大学教育のために中産階級のインド人に経済的負担を強いることは、個人的にもインドの社会全体にも好ましからざる弊害を招いた。ベンガルの学生がスワデン運動や過激な民族運動の闘士になった一因には、上記のような状況で学位を取得するにもかかわらず、官僚の世界では同程度の教育を受けたイギリス人の上に立つことができないという実情があった。ベンガル分割令の撤回は確かに、原住民にとって民族が再統一される歓迎すべき政策ではあったが、同時期に発令されたカルカッタからデリーへの遷都は、カルカッタ大学の学生には官職への道が狭まる憂うべき事態を引き起こした。そのために、一時は収縮したように思われた反英感情が再燃し、ナショナリズム運動に身を投じる学生も現れた。彼らはカーライル通達 (Carlyle Circular) によってカレッジや大学を追われたり、官職への道を閉ざされることも覚悟の上で戦った。<sup>12)</sup> また富裕層の出身で、イギリスの大学で学位をとってICS (インド高等文官) に採用されても、スレンドラナス・バネルジー (Surendranath Banerjee, 1848～1925年) のように、イギリス人上司の人種差別のために官職を追放されてナショナリストになったインド人エリートも少なくなかった。<sup>13)</sup> 経済的にあまり恵まれない環境に育ったトンプソンは、このようなインドの教育事情を憂い、ナショナリズムに傾くインド人学生に同情を禁じ得なかったのであろう。そのような作者の心情が投影されている『償い』には、ナショナリストたちへの説教ではなく、イギリス側の意識の変革を求める意図が感じられる。

11) Lago, *op. cit.*, 46.

12) カーゾン総督の統治下で発令された、スワデン運動のような民族運動にかかわった生徒、学生を出した教育機関へ補助金、奨学金、総合大学への加盟を撤回するという脅迫めいた通達。スミット・サルカール著、長崎暢子〔他〕訳、『新しいインド近代史I—下からの歴史の試み』(見聞出版、1993年) 301-04頁参照。

13) インド人がインド高等文官 (ICS) の試験を受験するのは、東インド会社時代の1857年から表向きには許可されていた。しかし、試験はイギリス本国内で実施され、受験科目には英語・英文学が含まれ、5フィート6インチ(約165cm)以上の身長があることが要求された。それでも1869年にはラビンドラナート・タゴールの兄を含む3人のインド人合格者が出現し、その数は次第に増加した。バネルジーは、69年に合格したが、上司に嫌われて不当に解雇されたと言われる。C. Yajneswara. Chintamani, *Indian Politics since the Mutiny: Being an Account of the Development of Public Life and Political Institution and of Prominent Political Personalities* (London: George Allen and Unwin, 1940) 19; Harish Trivedi, *Colonial Transactions: English Literature and India*, (Manchester: Manchester UP, 1995) 147-48参照。

## III

1922～23年のドゥルガプル (Durgapur) に舞台が設定された『償い』は、アムリツァールの事件後に悪化したイギリス-インド間の関係修復の糸口をつかむために、あえて1922年のチャウリー・チョウラー事件<sup>14)</sup> 連想させるの暴動を盛り込んだ4部劇である。物語は、地方判事のウォルシュ夫妻、警察長官ロマックスの夫人、ミッションカレッジ校長グレゴリーの夫人、リクルート業者のホートンがテニスや酒を飲みながらの世間話にたわむれる場面から始まる。のん気そうに暇を持って余す彼らは、町中で起こるインド人の非協力運動とは無縁な存在のようにも感じられるが、自分たちを取り巻くインド人の様子の変化を敏感に感じ取っていた。とりわけ、インド人から吝嗇家として知られるロマックス夫人には、インド人が商品や洋服の仕立て代を釣り上げたり、園丁が乾燥を防ぐための水の取り換え回数を減らすために花瓶にひびが入ることは、犯罪的行為に思われた。憤る彼女の話聞いたウォルシュは、「今こそ自分たちが団結して、そんな召使たちの振る舞いをやめさせる時だ」(17)と意気込む。そのためには、ナショナリストの口を封じればよいのかもしれないが、ロマックス夫人によれば、「召使」たちが恭順の意を示さなくなった元凶は、「原住民を教育したことにある」という：

イギリス人が教育を施し始める前には、インド人は幸せで満足していた。それぞれが小さな家や庭、牛やヤギをもっていた……インド人は挨拶もなしにイギリスの旦那やメムサーヒブ (奥方) の前を通り過ぎることを夢にも思わなかった。しかし教育によって、インド人は甘やかされて役立たずになり、自分たちをイギリス人化してしまった。今や、太ったインド人書記は、自分たちがイギリス人と同様の教育を受けていると思っている。(15)

ロマックス夫人のようにインド人のイギリス式教育に反対する見解は、警察長官の夫や地方判事のウォルシュ、ホートンにも共通するもので、ナショナリズムが高まった第一次大戦後の英領インドにおいて支配層に浸透していた。なるほど1870年頃までは、マコーレー式に教育された「血と肌においてはインド人、しかし、趣味、見解、道徳、そして知性においてはイギリス人であるような階級」は、帝国政府のイギリス支配者と原住民の間に立つ中間的存在としてそれなりに重宝された。とはいえ、ロマックス夫人の言葉から窺い知れるように、インド人へのイギリス式教育は同化主義に基づくものではなく、自分たちの利益にかなう臣下の育成であった。それ故、19世紀末からの産業の発展によって民族資本家が成長し、西洋式の高等教育の機会に恵まれたインド人が各分野で活躍して、次第に政治に口出しするようになるのは、イギリス人支配者にとって都合が悪かった。そのような様相は物語の中では、インド人にミッションナー教育を施すグレゴリー夫妻に対するロマックス夫妻やウォル

14) この事件は、連合州のチャウリー・チャウラー村で起こった。警察が農民組合運動を弾圧したことに怒った活動家たちが、警察署に放火して22人の警察官が死亡し、172名のインド人に死刑宣告が下されたという。(最終的には19人が絞首刑にされ、残りは流刑となった。) ガンジーはこの事件に衝撃を受け、非協力運動の停止を決断した。スミット・サルカール、同掲書、301-04頁参照。

シュの批判的な態度に浮き彫りにされている。

バプティストの教育ミッショナリー、トム・グレゴリーとその妻は、バンクラのアングロ・インド社会のメンバーであり、官僚夫妻たちとの交際も認められている。しかし、彼らが当地に滞在するのは、政治・経済的な思惑とは無縁で、カレッジの学生にキリスト教的な文化や思想を広めることだった。インド人学生が家事の手伝いに来ないと言って怒るロマックス夫人に対して、グレゴリー夫人が「カレッジのカリキュラムは、荷物の運搬人や大うちわを扇ぐ下僕を輩出するためのものではない。私たちは良家のインド人が文芸や科学で学位を取るように教育している」(17)と反論するのは、ミッション活動が世俗的な帝国主義とは距離を置いていたことを物語っている。ミッショナリーにとっては、インドで一度も教会に顔を出さないような行政官たちのインド統治は、神が授けた倫理的信託、即ち文明化されたイギリスが野蛮なインドに文明の光をもたらす使命を果たしているようには感じられなかった。確かにグレゴリー夫妻がミッションカレッジを運営してもキリスト教へ改宗するインド人は稀であったが、「イギリス人男女の中に、本当に良きキリスト教徒の支配者を生み出せなかった」ことのほうが問題であった。そのために、夫妻は学生がスワデシ運動に加担して、民衆を扇動することにも寛容で、それがまたロマックスやウォルシュの不興を買うことになる。彼らとグレゴリーとの次のような議論は、双方のインドのナショナリズムについての見解の相違を明らかにしている：

ロマックス：もし君の学生たちがいなくなったら、こんな事態にはならなかっただろうに。

グレゴリー：それは少々不公平な見方じゃないかね。争いが起こるのをすべて、多くの激しやすい学生のせいにするのは、

ロマックス：誰があのだいまねをする扇動者たちを焚きつける材料を提供するんだ。

グレゴリー：君の言うとおりの当然、学生だろう……<sup>15)</sup>

ロマックス：そんな話を前に聞いたことがある。僕がうんざりするの、あいつらに説教や教育を施すために品性のある男が時間を無駄にすることだ。ウォルシュ、君はうんざりしないかい。

ウォルシュ：そんな事は考えたことがない。最近、忙し過ぎるんだ。時間があつたら考えるよ。確かに問題だ。そうだ、何故それなりの品性と教育があり全く愚かだというわけでもないグレゴリーが——多分もっと働かずに、他の仕事でいい生活ができるのに——異教徒の教育のために時間を無駄にするのかわからない。奴らはそれに感謝しているのか。いいや、チャンスがあれば奴らは彼らを八つ裂きにするんじゃないか……

15) グレゴリーは、トンプソンの分身ともいえる人物で、物語で言及されるカレッジの学生たちの反英感情は、第一次大戦から復員後の1920年にバンクラで彼が遭遇した次のような体験に基づいて描かれている：

学生たちは勉強に励む気にはならなかった。ガンジーの非協力運動はついに、この平和なバンクラ地区にまで押し寄せた。大半の学生はその運動に異議を唱えたが、「過激な少数は総ての穏健な意見をどなって封じ込めた。リレー演説は学生たちを扇動し、カレッジは「国民化」されるべきで、政府の補助金を拒否し、一種のカルカッタ大学の模倣である国民大学へ総てを委ねるという実行不可能な署名のない請願書を作成させた。カルカッタ大学の学生はストライキを起こした。扇動者が外からバンクラへやって来て、非協力運動が至る所に広がり、2週間カレッジは閉鎖せざるを得なくなった…… Lago, *op. cit.*, 177.

グレゴリー： それじゃあ、なぜロマックスが——彼もまたそれなりの品性があるのに——自由主義的な本能を持つ人間で、別の人間の見地に立つことに長けているのに、あわれな百姓を取り調べ、自分も同じ境遇だったらそうするだろうことをしているだけの青年たちを弾圧するのか……インド警察という名にかけて、  
(20-21)

グレゴリーのようなミSSIONナリーが、帝国政府の官僚、「異教徒」の原住民双方に対して、緊張を強いられた関係であったことは、上記の3人の会話から明らかである。実際にインドのナショナリストには、MISSION・スクールやオックスブリッジの出身者が多かったことを考慮すると、キリスト教の布教活動やイギリス式教育は、「神の恩寵」とか「文明の信託」を謳い文句にした帝国主義の先鋒であったと同時に、英領インドを瓦解させる原動力、即ち「諸刃の剣」であったと言える。経済的に植民地に依存していたイギリス人たちは、そのような成り行きに腹立たしい思いがしたのであろう。アングロ・インド小説の中では、MISSIONナリーが好意的に描かれているものは少なく、布教活動の虚しさや、キリスト教に改宗したインド人の欺瞞性が強調されているものが多い。<sup>16)</sup> しかし、1857年のインドの大反乱時に西洋教育の恩恵に預かったベンガルのエリートが立ち上がらなかったことや、ラームモホン・ロイやヴィディヤサガルのような人物が、幼児婚や寡婦の殉死等の非人道的なヒンドゥーの因習の廃絶に協力したイギリス人の支配に異議を唱えなかった事実からは、キリスト教精神の伝授やイギリス式教育そのものが、植民地支配の妨げとなったとは言えない。ラームモホン・ロイは、セランポール・MISSION (Serampore Mission) のバプテリスト・MISSIONナリーや、ユニテリアンの聖職者たちとの交際から、キリスト教の教えを高く評価した。彼にとって、社会改革運動に理解を示したイギリス人の官僚たちは、ムガールの支配者よりは好ましく、早急にインドから追い出すべき存在には感じられなかった。彼と同様にキリスト教信仰に傾いたケショブ・チャンドラ・センにいたっては、イギリスによるインド支配を「神の摂理に基づく僥倖」と公言するほど「信」英的であった。<sup>17)</sup> 彼らは、ヒンドゥー教を捨て切れなかったにせよ、キリスト教の博愛精神を理解した人物であり、政府の方針に協力的であった。ちなみに、バプテリストのセランポール・MISSIONが、インド諸語の文字研究をして印刷技術を開発したり、インド諸語の翻訳を手がけて帝国支配を円滑にし、インド人の教育や文化交流・情報伝達等に貢献したことは注目に値する。<sup>18)</sup>

トンブソンがグレゴリー夫妻を好意的に描いているのは、教育MISSIONナリーであった自らの立場を擁護したい気持ちからであろうが、インドにおけるMISSION活動がインドで果たした役割を複眼的な目でとらえていたことにもよるのであろう。10年あまりバンクラに滞在した彼は、最終的にはMISSION教育から身を引くものの、<sup>19)</sup> セランポール・MISSION

16) アングロ・インド小説に描かれるMISSIONナリーやインド人の改宗問題については、Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974) 148-56; Susan How, *Novels of Empire* (New York: Columbia UP, 1949) 50-59参照。

17) ラームモホン・ロイやケショブ・チャンドラ・センのキリスト教やイギリス統治についての見解は、山下博司著『ヒンドゥー教とインド社会』(山川出版社、1997年) 68-71, 73-76頁参照。

18) セランポール・MISSIONの活動は、Kanti Prasanna Sen Gupta, *The Christian Missionaries in Bengal, 1793-1833* (Calcutta: Firma, 1971) 34-37, 87-96参照。

19) トンブソンは1923年に帰国しオックスフォード大学で教鞭を取るようになってからは、MISSION活動から遠ざかった。Lago, *op. cit.*, 188参照。

ン等の活動がインド社会へ弊害ばかりではなく文化的な利益をもたらしたことを認識していたと思われる。そのために彼は、インド人の反英感情の高まりとそれを弾圧するイギリス側の非道ぶりを目の当たりにして耐え難い思いにかられたに違いない。『償い』にはそのようなイギリス-インド間の「憎悪」の根本的な原因を探り、改善策を見出すためにイギリス式エリート教育を受けた急進派ナショナリストのバサンテ・チャテルジー、非協力運動指導者のナゲンドラナス・シン、イスラム過激派のイナヤット・カーン、ガンジーを連想させるマハトマ・ラナーデと、その支持者であるC. F. アンドルーズ (C. F. Andrews, 1871～1940年) の分身ソープ、インド人歴史学教授のサラットチャンドラ・ダッタ等、様々な立場にたつ人物を暴動事件に関与させ、彼らの主義主張を読者に訴えかけている。

#### IV

ドゥルガブルの近隣の村カンティハル (Khantihar) で起きた暴動の原因は明らかにされていないが、ロマックスによれば、急進派ナショナリストのチャテルジーが、政府に不満をもつ人々や「グレゴリーが教育した教養のある民衆」を扇動したことによるという。ガンジーの到来を契機に、<sup>20)</sup> 住民の非協力運動、ハルタル (一斉休業) は日常茶飯事になったものの、クリシュナ像が担ぎ出されたり、「ヨーロッパ服を着た」男の腹わたを切り裂くライオン顔のヴィシュヌ神像が掲げられる宗教色を帯びた騒動は、「生贄を要求する」危険なものに感じられた。そのようなロマックスの危機感、ボンベイの暴動やモブラー族の反乱 (1921年) に関与したとされるイナヤット・カーンの到来で高まる。彼は「烈火のごとくイギリス人を憎み」、「他の哀れな人々を大量殺人に駆り立てたり、殺される羽目に陥れる」影役者であった。イナヤットがバンクラ周辺で扇動できるのは、ベンガル民族ばかりではない。折あそば、彼が貧しいサントル族を焼きつけてヒンドゥーの地主を殺害させることも十分に予測された。暴動を鎮圧しドゥルガブル周辺の治安を取り戻すためには、イナヤット・カーンの身柄を確保することが必要であった。そう判断したロマックスはインド人警部補と6人の警察官を伴ってカンティハルへ急行する。しかしグレゴリーには、「なぜイナヤット・カーンが町全体を揺さぶり最も穏健な人々まで狂気に駆り立てるのか不思議だった」(46)。そこで彼は、同僚のサラット (サラットチャンドラ・ダッタ) 教授にその理由を尋ねると、「インド人以外には、誰にも分からないだろう」との答えが返ってくる。次の二人の会話は、グレゴリーのような親インド的に感じられるイギリス人でさえ、インド人の心の奥底を理解できず、それ故に事がこじれることを示唆している。

グレゴリー： どういう意味だ。私にはイナヤットが支配力をもつ理由が分かりそうなものなのに、君はインド人の大望に私が共感していることを認めてくれないのか……

サラット： あなたに感謝していないインド人はいません。6人くらいのイギリス人しか、あなたのように私たちのために骨を折ってはくれません。だから皆このストライキの最中に

20) ガンジーは1922～24年にかけて、プネーの監獄に収監されていたが、トンプソンは「非暴力」を訴えるために、彼を連想させる人物をあえて物語に登場させている。

もあなたのカレッジがかなり平穏だとわかっています。彼らが我々を攻撃してくるのは、それだからでもあるのです。今日、バサンテ・チャテルジーは、本当の敵はグレゴリー氏のような人間だと言ってました。なぜならあなたのような人々が我々にイギリス人は正しく、理性によって行動すると思わせるからだと……

サラット： あなたは品性のある一人のイギリス人のように話をします。でも、我々はもう品性のあるイギリス人は一人もいなくなったと考えています。

グレゴリー： 余計に分からなくなった……私は本当にインド人の考えていることを理解していると思っていた——それで頑張ってきた。だが、それはカーテンをくぐり抜けたら、そのカーテンの背後にあった堅い壁にぶち当たったようなものだ。

サラット： イナヤット・カーンは思い出さない方がよいことを思い出させるのです。

グレゴリー： 例えばどんな事を。

サラット： インド人のことを、あなた方イギリス人が理解できない例や、共感できない事項を挙げながら考えてみてください。  
(46-49)

グレゴリーがいくらベンガルの文学や宗教を学んでもサラットの言い分がわからないことに関して、一般的にイギリス人は——フランス人やロシア人に比べると——被支配民族の心理や人生観を理解する想像力に欠けるといふ批判は無視できない。<sup>21)</sup> ラフカディオ・ハーンのような例外はあるものの、イギリスにはピエール・ロティやゴーギャンのような東洋を題材にした素晴らしい小説家や芸術家が生まれなかったのも、その論拠と言えよう。1923年にオックスフォード大学にベンガル語講師として招かれたトンブソンは、そのインド学がサイド流に言えば、「支配のための様式」であるように感じた。附属のインド教育機関は、ICS制度を支えるための「便宜的装置」にすぎず、そのインド史の授業では、「英領インド史」のみが講義されていた。オックスフォードには、かつてのインド学教授マックス・ミュラー (Max Müller, 1823~1900年) が講義したアーリア神話や『リグ・ヴェータ』に興味をもつ学生はいなかった。「インド人学生には、相変わらず何の思いやりも示されず、オックスフォード大学や一般大衆にインドを真剣に考えさせるような企画も全くなかった。」<sup>22)</sup>

『償い』の中でこのようなイギリス側のインドに対する無理解や関心の低さは、イナヤットの共犯として捕えられたチャテルジーを通して批判されている。かつて若きチャテルジーは、「オックスフォードでは世界の文化に触れ、イギリスとインドは緊密に結びついているのだから、アーリア文化を称える人々にも出会えるはずだと思っていた」(95)。ところが、当地では「最も粗末な下宿」の女主人でさえ、彼の食料品をくすねたり電気代を水増しするほどインド人を見下す有様だった。聖ピーターズ・カレッジ (オックスフォード大学のカレッジの一つ) のボート競技の選手として奮闘しても、イギリス人学生たちは彼の「顔の色」を嘲笑するような野次を飛ばした。彼らにとって、カーリ・ダーサの英訳を披露するチャテルジーはからかいの対象にすぎない。スコットランドの子供歌を「サンスクリットの合唱」と

21) この点に関しては、Susan Howe, *Novels of Empire* (New York: Columbia UP, 1949) 61 参照。

22) Lago, *op. cit.*, 198.

もじって喧しく歌い、彼の朗唱をかき消すのが愉快でたまらなかった。学生会が主催する弁論大会といえば、かつてエドモンド・バークやグラッドストーンの良き演説の練習舞台であった。しかし、英語の「おしゃべり、むだ話」(chatter, jabber)を連想させる名をもつチャテルジー(Chatterjee)が、弁論大会で熱弁をふるってもそれはイギリス人学生には「仰々しく」耳障りなもので、雑誌『テムズ』には下記のような茶化した記事が掲載された：

ジャバーさん(おしゃべりさん)——失礼しました、チャテルジーさん——しかし、つまるところ早口のおしゃべり(jabber)も無駄話(chatter)も私たちが羽目をはずす言い訳となる同じような言葉です。だから今夜は、弁論大会でのあなたの最も思いがけないユーモアのある演説のおかげでにぎやかな夜になりました。(93)

人種差別的なオックスフォードの雰囲気嫌いがさしたチャテルジーは退学してドイツへ渡り、そこで出会った教授や学生の古代インド文化に対する興味の深さに感銘して「自尊心」を取り戻す。カーリ・ダーサもチャンドラグプタⅡ世の名も知るドイツの学生たちは、熱心に彼に教えを求めた。そのような環境の中で、チャテルジーは「対等の人間として扱われた」と感じたという。

ウォルシュが弁解するように、オックスフォード大学生のチャテルジーに対するからかいは、それほど毒気のないものであったかもしれない。またドイツ人が、文学や芸術の世界で「アリア文化」に心酔したとはいえ——彼らの反ユダヤ主義に基づく第二次世界大戦時の残虐行為を想起すれば——人種差別的でなかったとは言えない。それはさておき、従属民であり、「笑う」タイミングも異なる民族性をもつチャテルジーが、イギリス流のユーモアを理解できず、学生の悪ふざけをすべてインド人を馬鹿にする人種差別と感ずるのも無理からぬことである。今さらのようにそれを悟ったウォルシュは、それまで「聖ピータースの恥さらし」と非難していたチャテルジーに同窓生として、かつてのオックスフォード大学生の無礼を謝罪し、自分が傷つきやすいインド人の心のひだを理解していなかったことを恥じる。なるほどウォルシュは、かつてイギリスとインドの溝を埋めようとカルカッタの東西交流会に出席もしていたし、仏陀の生涯をテーマにしたエドウィン・アーノルド(Edwin Arnold, 1832~1904年)の詩を読んだこともあった。しかし、彼にはヒンドゥーの叙事詩は「蓮」や「牛」が描かれる「たわごと」(twaddle)にしか思えない。彼とインドのナショナリズムを支持したアイルランド女性のアニー・ペザントとの文通も一回限りだった。インド人の部下には「少々ましな男」もいたが、ウォルシュはアフタヌーン・ティーや晚餐に彼を招待しようとは「夢にも思いつかなかった」という。彼の周囲ではイギリスとインドの溝は許容され、両者は「お互いに溝を挟んでにらみ合いながら、双方を気に入っていた」(73)のが実情であった。

サラットやチャテルジーの告白によって、イギリス人側のインドに関する無理解や人種差別が、反英活動の一因であることをあらためて認識したウォルシュやグレゴリーは、事態を收拾するためにはイギリス側の「償い」が必要であるというソープの意見に耳を傾けるようになる。それまで、グレゴリーは、イギリス側のインド支配を酷評する雑誌記事を、インド

のナショナリズムのプロパガンダとして非難していたものの、イギリスの歴史の教科書にも自国に都合の悪いようなことは書かれていないことを悟る。ソープの言うとおり、武器をもたぬ多数のインド人を殺害したアムリツァール事件に関しても、イギリス側は何の「償い」もしていないように思われた。そもそもミSSIONナリーであるグレゴリーや判事のウォルシュが、カンティハルの暴動を鎮圧するためとはいえ、ライフル銃を発射し罪のない女子供を巻き添えにするようでは、サラットから「品性のあるイギリス人は一人もいなくなった」と言われるのも当然であろう。どちらが先に手を出したかは別として、ロマックス一人の死に対して何人ものインド人が命を落とす羽目になったカンティハルの事件は、インド人側により多くの犠牲者が出たインドの大反乱の縮小版とも言える。つまるところ、「償い」とは武器を一切もたずに、ソープのようにイギリスの同胞から白眼視されつつインド人の大義のために活動したり、ナゲンのごとく大学教員の地位を捨てて同胞のナショナリズムに献身することのように思われる。

無辜のインド人を犠牲にした「償い」を考えたウォルシュが、暴動の影役者にすぎず同窓生であるチャテルジーの罪を不問にすることは、オーロビンド・ゴーシュ (Aurobindo Ghosh, 1872~1950年) の例を顧みれば、<sup>23)</sup> それほどイギリス側から非難を浴びる行為とは思えない。しかし、ロマックスの殺害に関与したイナヤット・カーンまでが釈放されるという物語の展開は、イギリスの読者の意表を突くものであったのではないだろうか。

## V

イナヤット・カーンが警察長官ロマックス殺害に関与したのは計画的な犯行ではなかった。明確には描かれていないものの、チャウリ・チャウラー事件を連想すれば、反英活動を取り締まるイギリス側の挑発は十分であったに違いない。捕えられたイナヤットの弁明によれば、「ロマックスは怒りに燃えて自分を押しつけ投降を命じた。それから——何が起こったのかわからない——彼が自分の足元に横たわっているのを見た」(111) という。その場にいたチャテルジーの証言では、イナヤットはロマックスを棍棒で殴って気絶させただけで、とどめをさしたのは石を投げつけた群集であるとのことである。彼らの証言の真偽はともかく、イギリス官憲の殺害に関与した彼は、モード・ダイヴァーの手にかかれれば、野蛮な反徒として即座に銃殺されるか、裁判にかけられて絞首刑に処せられる人物である。しかし、イナヤットの言い分を理解すれば、彼もそれなりに「純粋なインドの愛国主義者の信憑性のある肖像画」として描かれているように感じられる。

イナヤット・カーンが「イギリス人を烈火のごとく憎む」気持ちは、チャテルジーの反英感情の類ではなく、インドの大反乱にまつわる怨念によるものであることは、次のような彼と暴動事件の関係者との会話によって明らかにされている：

23) ゴーシュは1908年のアリポール (Alipore) 爆弾事件に関与したとして裁判にかけられたが、ケンブリッジの同窓生であった判事の計らいもあって一年拘留された後に釈放されたと言われる。須田禎一著『印度五千年通史』(白揚社, 1942年) 237頁参照。

イナヤット・カーン： ダルハウジーはアウドを強奪した。そして独立戦争，お前らが「大反乱」と呼ぶ戦争が始まった。わしの父は東インド会社イギリス軍のセポイ兵だった。反乱が始まり，父は軍隊が解散されたので帰郷した。イギリス人と戦った集団が，父の農場に住みつき，そこで収穫される穀物を食べていた。イギリス人の一団が激しい顔をしてやって来た。

ホートン： それからどうなった。

グレゴリー： 急襲されたのか

イナヤット・カーン： セポイ兵たちは逃げた。それで奴らは，農場で捕えたセポイ兵全員を銃殺してから村を焼き払った。他の民衆も絞首刑にした。父も絞首刑にされそうになったが，一団のリーダーが父は村長で，脱走兵でもあるから見せしめにするべきだと言った。それで父を連れて行った。

ラナーデ： 話を続けなさい。このイギリス人たちに歴史書では伝えられぬことを聞かせてやりなさい。

イナヤット・カーン： どんな裁判だって言うんだ。裁判だって！……奴らは法廷に引きずり出された全員を絞首刑にした。軍事法廷が父に判決を下し，大砲の口から彼を吹き飛ばした。

ホートン： ウォルシュ！ グレゴリー！ まさかそんな話は本当じゃないだろう！……グレゴリー！ そんなことが起こったのか。

グレゴリー： 本当にあった話だよ。マックス。

ソープ： 血だ，いつも血が流れる。各々の殺人行為が悪霊となって新鮮な血を飲むまで世界を歩き回る。70年前のあの行為が今日の血を飲む。

(106-08)

ラナーデがやグレゴリーが認めるように，イギリス人が反徒を出したと思われる村を次々に焼き払って女子供を犠牲にしたり，反乱に全く無関係なインド人までも次々に処刑したという話は，偽りではない。なるほど『オックスフォード版インド史』や，『ケンブリッジ版インドの歴史』にはそのような逸話や，ヴィクトリア女王が，「イギリス軍の非キリスト教徒的な行為を悲憤した」<sup>24)</sup> といった下りは見当たらないが，東インド会社の軍人の回想録などからもイギリス人がインドの反徒にひけをとらぬ残虐行為を行ったことは，現在ではイギリスの歴史家も認めている史実である。ブライアン・ガードナーが述べるとおり，「インドの大反乱によって深まったイギリス人のインド人に対する不信感と不快感はより深まり，それは半世紀の間続いた。一方インド人の方も，イギリス人が……残忍で，好戦的で征服に熱心であることを確かめた。」<sup>25)</sup>

イナヤット・カーンとイギリス支配者たちの言動からは，ガードナーが指摘するようにイギリス，インド双方がお互いに「未開の野蛮人」とか「残忍な征服者」と見なした表象行為が，「半世紀」どころか70年後のナショナリズム運動の過激化やそれを弾圧するイギリス側の苛酷さを生み出したことが浮き彫りにされている。即ち，イナヤットが「イギリス人を烈火のごとく憎む」のも，インドの大反乱時におけるイギリスの暴虐の体験だけを基に彼らを

24) ブライアン・ガードナー著，浜本正夫訳『イギリス東インド会社』（リプロポート，1989）379頁。

25) ガードナー，同掲書，393頁。

見ているためであり、ロマックスのようなイギリス支配者が過激なナショナリストを恐れ、手厳しく弾圧するのは彼らを大反乱時の「野蛮な反徒」に見立てるからである。そのような見解は、『メダルの裏面』にも、次のように示唆されている：

残酷な幻滅や失望の源である教育システムもあった。しかしこれらはイギリスという名を本当に憎く思うことを釈明してはいない。確かに憎悪——凶暴で強固な憎悪——がイギリスとインドの間にはある。私たちがこの事実を早く認識すればするほど、そしてその原因を早く探究すればするほど良いだろう。私たちの統治に対するインド人の不満は普遍的に高まる一方だ。まず民衆に広く共有されている記憶があるはずで、その記憶によって、なぜ統治への不満が蔓延するのかを説明できる。そして次に、不満の中核に燃え上がるような憎悪があるはずで、それを確認すれば統治への不満がなぜこのように急速なはずみをつけて伝わったのか納得できる……<sup>26)</sup>

上記のインドの「民衆に広く共有されている記憶」とは、インド大反乱時のイギリスの暴虐に他ならない。サラットによれば、イナヤットはその「思い出さないほうがよいことを思い出させる」故に民衆を炊きつけることができた。それを知ったラナーデは、「私はあえて血の代償を求めるようなことはしない、それがイギリス、インド双方にとって『償い』になる。私が殺人の罪を贖う」(109)という言葉によって、関係者一同に自己犠牲の精神をもって暴力の連鎖を断ち切るように求める。またソープは、それぞれの言い分を理解してお互いを「野蛮人」と見なす誤表象を改めることが、流血騒ぎのインド問題を解決する糸口であることを説く。それまで「烈火のごとく」イギリス人を憎んでいたはずのイナヤットも、過激なナショナリストになった経緯に同情を示すグレゴリーやホートンの態度によって、「ロマックスが生き返ってくれたら」(111)と願うほど、イギリス人に関する表象が一面的であり過ぎたことを認める。そんな「憎悪の炎が鎮火した」イナヤットの様子とラナーデの自己犠牲的な「非暴力」精神に感銘したウォルシュは、反英感情の火に油を注ぐような制裁を避けるべく、自らのキャリアを捨てる覚悟でチャテルジーと共にイナヤットを放免し、暴動事件に決着をつける。

## おわりに

ガンジーが1920年代後半からナショナリズム運動を拡大させ、イギリス—インド問題がさらに悪化したことを考慮すると、イナヤット・カーンが釈放されたことに満足したラナーデが、ウォルシュやグレゴリー、ホートンと握手をする『償い』の幕切れからは、何とも言えぬ矛盾を孕むハッピーエンドという印象を受ける。しかし、それはその後のインド史を知る感想であり、『償い』に込められた作者のメッセージにはそぐわないものであろう。物語の設定年代において、一般的なイギリス人はインドに「自治」を与えるとしても、それは遠い将来のことに感じていたようである。またその「自治」とは、完全な独立とは異なる意味合いをもっていた。『償い』や『メダルの裏面』を執筆当時のトンプソンは帝国主義を謳歌したモード・ダイヴァーと同様、自らのインド体験を顧みて、自治権をもつ英連邦内

26) Thompson, *The Other Side of the Medal*, 26.

の一国としてインドを再構築することを願い、イギリスとインドが絆を断ち切ることには同意できなかった。いかにナショナリズム運動が高まろうと、様々な宗教、カースト、民族が入り組んで内部抗争の絶えないインドからいきなりイギリス人支配者が撤退しては、それこそ混沌を招く無責任な話に思われた。確かに原住民へのミッション活動やイギリス式教育には社会的な弊害が伴ったことは認めなければならなかった。イギリス人がインド人をあらゆる局面で差別していたことも否めない。しかしイギリス人が様々な利害の対立するインド人の間に立つ公平な審判員であり、その強硬な手段に問題はあっても、それなりに治安維持を保っていたことも否定し難い。1920年代の作者がイギリス—インドの問題についてそのような見解をもったことは、スラットの「インド人には、イギリス人のような明晰な目的意識や頭脳がなく、自治能力がない」(50)という告白や、ラナーデの「神がイギリス人をインドへ送り込んだ」(105)という言葉から窺い知れる。結局、物語で繰り返される「償い」とは、インドを社会・経済的に搾取したことに対して損害賠償をすることでもなければ、政治体制の大改革でもない。それは帝国主義の犯した過去の過ちや人種差別政策を悔いて謝罪し、インド人に自尊心とイギリス人への信頼を取り戻させて、将来のインドの政治的な自立を支援するというようなものと思われる。現代的な観点からはそのようなイギリス支配を浄化するような「償い」が、1920年代に至っては手遅れであったことは否めないが、それをオックスフォード大学からの追放も覚悟して、<sup>27)</sup> トンプソンが読者に呼びかけたことは評価されるべきであろう。

#### 【参考文献】

- Chintamani, C. Yajneswara. *Indian Politics since the Mutiny: Being an Account of the Development of Public Life and Political Institution and of Prominent Political Personalities* (London: George Allen and Unwin, 1940).
- Edwards, Michael. *British India 1772–1947: A Survey of the Nature and Effects of Alien Rule* (London: Sidwick, 1967).
- Greenberger, Allen. *The British Image of India: A Study of the Literature of Imperialism 1880–1960* (London: Oxford UP, 1969).
- Gupta, Kanti Prasanna Sen. *The Christian Missionaries in Bengal, 1793–1833* (Calcutta: Firma, 1971).
- How, Susan. *Novels of Empire* (New York: Columbia UP, 1949).
- Islam, Shamsul. *Chronicles of the Raj: A Study of Literary Reaction to the Imperial Idea towards the End of the Raj* (Totowa, New Jersey: 1979).
- Lago, Mary. *India's "Prisoner": A Biography of Edward John Thompson 1886–1946* (Columbia: University of Missouri Press, 2001).
- Nicholson, Kai. *A Presentation of Social Problems in the Indo-Anglian & the Anglo-Indian Novel* (Bombay: Jaico Publishing House, 1972).
- Raina, Shashi. "Edward John Thompson: Grasping the Colony" in *Encountering the Indian:*

27) サヴァルカールの『1857年のインドの独立戦争』が禁書であった当時、イギリス側の暴虐に言及する『償い』や『メダルの裏面』を出版するのは、元ICSの同僚たちを怒らせ、彼の研究者としての評判を落とす危険を伴った。Lago, *op. cit.*, 208–09参照。

- Contemporary European Images of India*, ed. by Vibha Maurya (New Delhi: Aryan Books International, 1999).
- Singh, Bhupal. *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974).
- Smith, A. Vincent. ed. by Percival Spear. *The Oxford History of India* (Oxford: Clarendon, 1961).
- Thompson, John Edward. *Atonement: A Play of Modern India in Four Acts* (London: Ernest Benn, 1924).
- Thompson, John Edward. *The Other Side of the Medal* (1925; rpt., Westport, Connecticut: Greenwood, 1974).
- Trivedi, Harish. *Colonial Transactions: English Literature and India* (Manchester: Manchester UP, 1995).
- ブライアン・ガードナー, 浜本正夫訳『イギリス東インド会社』(リプロポート, 1989年).
- V. D. サヴァルカール, 鈴木正四訳「セポイの反乱」『世界ノンフィクション全集7』(筑摩書房, 1968年).
- 須田禎一『印度五千年通史』(白揚社, 1942年).
- スミット・サルカール, 長崎暢子〔他〕訳『新しいインド近代史I—下からの歴史の試み』(見聞出版, 1993年).
- 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治—インド高等文官への道—』(中央公論社, 1991年).
- 本田毅彦『インド植民地官僚—大英帝国の超エリートたち』(講談社, 2001年).
- バーバラ・D・メトカーフ, トーマス・R・メトカーフ, 河野肇訳『インドの歴史』(ケンブリッジ版世界各国史)(創土社, 2006年).
- 森本達夫『インド独立史』(中央公論社, 1988年).
- 山下博司『ヒन्दウー教とインド社会』(山川出版社, 1997年).
- 山本達郎編『インド史』(山川出版社, 1972年).
- 吉岡昭彦『イギリスとインド』(岩波書店, 1975年).